



デジタル時代の今だからこそ「身体診察」

評者 倉原 優 国立病院機構近畿中央呼吸器センター 呼吸器内科

名著『サバイラ』の原書第5版・翻訳第2版である。「身体診察」について1,000ページも書かれた本など、寡聞にして知らない。

私は身体診察の教育に力を入れた病院で研修を受けたため、どちらかと言えば“アナログ”な医師である。6年前の前版で初めて『サバイラ』に触れたが、本書はこれまで学んだ身体診察技法を昇華させてくれる師となった。今でも時々読み返すくらいである。

ピアニストがピアノを奏でるがごとくに

私はもともとピアノ弾きなので、本書では「胸部打診」の項目が一番好きだ(pp.435~436)。「最初は強く(ストローク4インチ)、2番目はより弱く(ストローク2インチ)」という細かい技法にも感嘆するが、そのあとが大事である。「爪の長い医学生には、短く切るようにアドバイスしたい」。私が好きなのは、こういうところである。打診を考案したのはアウエンブルグラーというオーストリアの医師であるが、彼がサリエリという宮廷音楽家とオペラを書いていたという本書の余談はとても面白い。ちなみに、アウエンブルグラーの2人娘は、その後サリエリにピアノを学び、優れたピアニストとして活躍したらしい。

打診は、打診音を美しく出さなければいけない。そのためには、利き手の指のストロークと初速が大事なのだが、その練習法を複数あげて書かれてある本書は驚異的である。医学生時代、私は臨床実習前に、飲水前後の自分の腹部を打診して練習したものだが、『サバイラ』には「炭酸飲料」と書かれてある。水じゃなくてコーラにすればよかったのかもしれない。

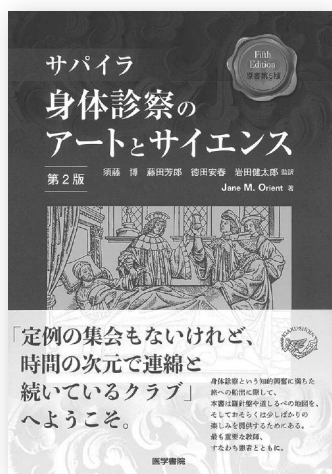
本書の特長は、向こうから語りかけてくる書き方にある。身体診察に重きを置くと、どこかで目にした無難な記述になってしまいそうなものだが、この本はまるでどこかの病院のカンファレンス室のホワイトボード前で、また実際の患者のベッドサイドで、レクチャーを受けているような錯覚さえ覚える。「アドバイス」「指導医へ」「自己学習」などのサブ項目の完成度は高く、研修医のレクチャーと一緒に聞いていた指導医が、「君たち中堅医師も、これに注意したまえ」と襟を正されるような記述が随所に登場する。

4つの代表的診察技法(視診・聴診・打診・触診)の5つ目にポータブル超音波はどうですか¹⁾、と言われるほど“デジタル”な時代になってしまった。医師経験が長い人ほどデジタルに足元をすくわれそうになった経験が思い出に苦みを残している。実はそんな時、身体診察に助けられる場面は多いのだ。だからこそ、『サバイラ』である。

G

文献

- 1) Narula J, et al : Time to add a fifth pillar to bedside physical examination ; inspection, palpation, percussion, auscultation, and insonation. JAMA Cardiol 3 (4) : 346-350, 2018. PMID 29490335



サバイラ 身体診察のアートと サイエンス

第2版

Jane M. Orient = 原著

須藤 博、藤田芳郎、徳田安春、

岩田健太郎 = 監訳

定価：本体 12,000 円＋税

B5・998 頁／医学書院／2019

[ISBN978-4-260-03934-5]